

にじゅうよにんりきし

二十四人力士 (緒川)

むかし、緒川おがわに二十四人力にじゅうよにんりきといわれる力持ちからもちの力士りきしがいました。この力士りきしは、善導寺西ぜんどうじにしにある八幡相撲場はちまんすもうじょうで相撲すもうをとっているときはいいものの、相撲すもうのないときには、力ちからがあり余あまってじつとしておられず、いたずらばかりしては、村人むらびとを困こまらせていました。

ある時ときには、善導寺本堂ぜんどうほんどうの柱はしらを持ち上げ、その下したにお参りまいの人たちひとのはきものをかくしたり、またある時ときには、道みちのまん中なかに大きな石いしを積み



上げて、通せんぼとおをしたりして喜よろこんでいました。

ある時^{とき}など、よその家の雪隠小屋^{いえ せつちんごや}（便所^{べんじよ}）をか
つぎ^あ上げて、とんでもないところへ持^もって行^いき、
あとに、くそがめだけが残^{のこ}っていたと言^いいます
から、それは、悪^{わる}いはずらをしたものです。

「こりや、なんとかせんといかんのう。」

「いっぺん、こらしめたるまいか。」

「いったい、どうしたらええだや。」

「それだて。まともなぶつかっては、あ^{ちから}の力^{ちから}だ。

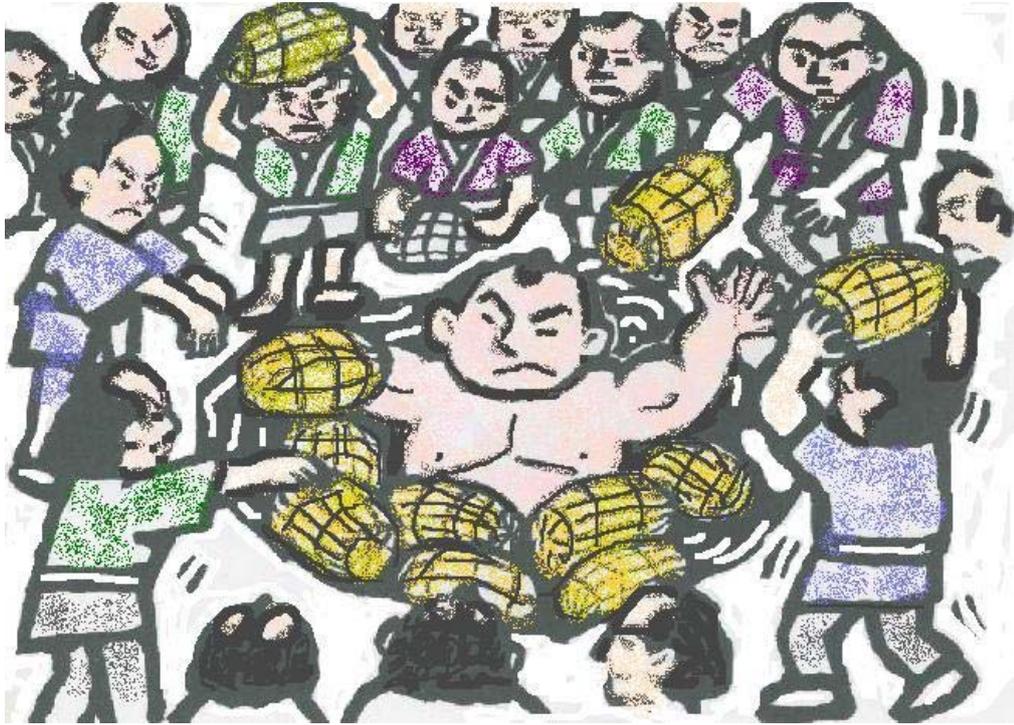
とてもかないっこねえ。」

と、村人^{むらびと}たちが寄^より集^{あつ}まって、いろいろと相談^{そうだん}し
た結果^{けっか}、この力士^{りきし}を生^いき埋^うめにする^{こと}になり
ました。

まず、上^{うえ}の山^{やま}の近^{ちか}くに深^{ふか}い落^おとし穴^{あな}を掘^ほり、
まわりに土俵^{どひょう}をかくして用^{よう}意^いします。そのそば
で、酒^{さけ}やさかなをすすめてこの力士^{りきし}をもてなし
ます。力士^{りきし}が酔^よっぱらったところで、穴^{あな}に落^おと
して、土俵^{どひょう}で埋^うめてしまおうというものです。

酒^{さけ}の好^{だいす}きな力士^{りきし}は、すすめられるま^{おお}まに大^{おお}
きなさかずきに何^{なんばい}杯^{ばい}も何^{なんばい}杯^{ばい}も飲^のみほして、すつ
かり酔^よっぱらってしまいました。その様^{ようす}子^みを見
た村人^{むらびと}たちは、この時^{とき}とばかりに、いっせいに
立ち上^たがって、彼^{かれ}を落^おとし穴^{あな}につき落^おとしまし
た。そして、力^{ちから}を合^あわせて用^{よう}意^いの土俵^{どひょう}をつぎつ

ぎと穴あなの中なかに投げ込みなました。しかし、二十四にじゅうよ



にんりき たいりき りきし あな なか お
人力もある大力の力士は、穴の中で、落ちてく
どひよう
る土俵を、まるで小石のように受け止めては投
かえ う と な かえ
げ返し、受け止めては投げ返してきます。それ
むらびと
には、村人たちもびつくりしましたが、そこは、
たせい ぶせい りきし よわ
多勢に無勢のことで、力士は、だんだんと弱っ
てきて、ついに力尽き、穴あなの中なかに埋うめられてし
まいました。
もの かいりきおとこ
さて、いたずら者の怪力男がいなくなつて、
むらびと
村人たちはほっとしたのですが、その後で、村
こども かみ でんせんびよう りゆうこう
の子供が神かくしにあつたり、伝染病が流行
むら
したりして、村ではよくないことが続つづいて起お
りました。

「これは、きっとあの力士のたたりがちがいね

え。困ったこった。」

「成仏できずに近くをさまよって、まだ悪さを

しとるんか。」

中には、二十四人力士の幽霊を見たという者ま

で出て、気味悪くなった村人は、また相談して、

力士を埋めたところに墓を建て、お坊さんにお

祈りしてもらいました。それから、村は、やつ

と静かになったということです。

二十四人力士の墓は、役場北の県道八幡緒川

停車場線そばのやぶに移され、いまでも花を供

える人がたえません。

▼ 二十四人力士の墓

